

大國隆正著『音凶神解』の翻刻と紹介

上西 亘

一、はじめに

大國隆正（寛政四（一七九二）年十一月～明治四年（一八七七）八月）の研究は、大崎勝澄・岡田實・阪本健一・上田賢治らがそれぞれ優れた知見を述べており、近年では武田秀章・森瑞枝・松浦光修・中村聡らが研究成果をあげている。今回取り上げる『音凶神解』⁽¹⁾であるが、大國隆正の代表作の一つと称されているにも拘わらず『大國隆正全集』刊行の際にも活字化されず、翻刻されたものも学術雑誌などに発表されていない。

また、『音凶神解』に直接言及している論文や書籍は管見の限りでは数えるほどしかなく、その内容自体には、未だ考察がなされていないといつてよい。

さて、隆正の事蹟で屢々注目されるのは、当時の最高水準といっても過言ではない東西の学問知識を総動員した、隆正の優れた見識から導かれた、外国観や政治思想である。これらは簡潔明快で、現代に生きる我々から見ても、隆正の思想や要点が理解できよう。加えて、これらの知識が、明治維新前後の神祇行政に関わった人物の思想形成に大きな影響を与えたのもまた事実である。

翻って『音凶神解』は、五十音図の妙理と、五十音図を構成する仮名文字一つ一つの本義を明らかにしようとした、隆正自身がライフワークとして位置づけた言語学研究の一部である。隆正の言語学研究に関する一連の著作は、外国観や政治思想を論じたものと比して、現代の感覚で捉えようとすると、その独特の感性から一見して理解することは

困難な内容である。

このような事情から、どうしても隆正の外国観や政治思想に研究の力点が置かれてしまうのはある意味当然といえよう。しかし、重ねて言うが、大國隆正のライフヒストリーの一側面として、隆正が五十音図と、それを構成する仮名文字一つ一つに、大いなる靈妙が備わっている事に、並々ならぬ学問的興味を持ち、生涯に亘ってその研究に力を尽くしていたという事実を無視することは出来ない。

本稿は、『音図神解』研究の肇として、安政二年頃に成立したとされる『音図神解』を翻刻し、併せて『音図神解』の若干の考察と、國學院大學蔵本の別本『音図神解』も併せて紹介することを目的とする。

二、『音図神解』について — 「別本」の存在 —

『音図神解』は安政二年頃⁽²⁾に成立した隆正の語義・音義解釈の書物である。一般に『音図神解』といえはこの書を指す。『国書総目録』によれば静嘉堂文庫、学習院大学図書館、京都大学図書館、國學院大學図書館、東京大学図書館（安政二写）、岩瀬文庫（自筆序跋）、無窮会神習文庫に写本が存在する。

今回の翻刻では岩瀬文庫蔵本の『音図神解』を用いた。縦二十二・五糎×横十五・六糎。巻数一卷二冊。一之上は

序二丁・本文五十二丁・跋一丁、一之下は序二丁・本文四十六丁・跋一丁からなる。序文の一丁表には岩瀬文庫の蔵書印と、羽田埜敬雄の蔵書印、羽田八幡宮文庫の蔵書印、神代文字の草書体で「かむならふ」と刻された校本印の計四種の朱印⁽³⁾が付されている。本文は一面に八行書き。一行には凡そ二十一文字から二十四字で書かれている。

なお、國學院大學図書館には三種類の『音図神解』が所蔵されていることが調査中明らかになった。一つは一般書として登録され、『国書総目録』が当該典籍を指している⁽⁴⁾とされる『音図神解』である。序跋は存在しない。そして貴重書として所蔵されている『音図神解』の内、原簿番号304・305が所謂安政二年に成立した『音図神解』であることが確認された⁽⁶⁾。

また、やや話が煩雑になるが「音図神解」と名が付くものには、『音図神解』の別本が二種存在する。一つは上・中・下計三冊の『音図神解』である⁽⁷⁾。しかしながら題簽には『音図神解』とある。内容は総論として五十音の一音一義を網羅的に記そうと試みたと思われる跡があるが、構成としては内題の巻数が欠けていたり、前後していたり⁽⁸⁾と「総論」以外は構想で終わってしまった感がある。

二つ目は、計十冊の『音図神解』⁽⁸⁾がある。書物の構成としては日記のように冒頭に年月日を付するなど、さながら

研究成果の覚え書きのような形式が取られている。一冊目に記される本義の、一丁目の日付は慶応二年二月となっており、最も新しい日付は辛未（明治四年）五月となつてゐる。なお、時系列として一冊目が成立年が最も古い訳ではなく、十冊とも慶応二年の日付があることからほぼ同時進行的に書かれたものであると推測できる。

最も新しい日付が隆正が没する三ヶ月前であることから解るように、まさしく五十音図に基づく言語解釈を自らの「ライフワーク」として、執筆に勤しんでいたことは特筆すべき点であろう。

これらを総合するに大國隆正が『音図神解』と称して著したものは、

- ① 上・下二冊の『音図神解』
- ② 上・中・下三冊の『音図神解』

③ 本義・阿行く也行からなる十冊の『音図神解』の計三種が存在することになる。⁹⁾隆正が『音図神解』という著作に対する思い入れの深さの程が伺えよう。本稿では安政二年成立の『音図神解』のみの紹介に留めるが、前述した「別本」との位置づけなどとの比較検討は今後の課題としたい。

三、『音図神解』の大略

隆正の言語学研究上における『音図神解』の位置づけについては、拙稿「大國隆正の言語学研究序説」¹⁰⁾にて概略を述べたが、確認の為再度簡単に言及したい。隆正が語義・音義に関して自説を述べる際には「くはしくは音図神解を見てしるべし」等と著書中にて読み手を誘導している箇所が多々見られ、¹¹⁾自他共に『音図神解』を語学研究の代表的著作として重きを置いていたことは想像に難くない。

一之巻上の冒頭で隆正は、

人のものいふこゑさま／＼にわかれてあれど、つまるところハあいうえおのいつより外ハあらず、いかにいづ

る

こゑも、長くひけバその長きに堪ずそのこゑを

うしなひて、あいうえおの五つにかえるをもて、これをさとるべしされはそのあいうえおの五つハ、あといふ

一こゑをもとにしていづるこゑなり、されバあはいそぢのこゑ、よろづのことばのもとにして、このこゑのこゝろよりあきらめおかざれば、わがくにの古言をとくそのまことにかなひがたかり¹²⁾

と、五十音中、あ行・特にあ[・]の字が他の全ての言葉の本となつてゐることを述べ、「あ」の持つ意味を理解できなければ古言を明らかにすることは出来ない⁽¹³⁾と述べる。

『音図神解』本文の内容自体は、それ以前に成立した他の著作でも述べた説を再構成しているように見受けられる。また、隆正が当初想定した、五十音の一音一義を詳細に書き表した著作というよりは、五十音図を理解する上で、隆正が最も重視すべき事柄を、読み手に平易に伝えようとした五十音図についての概説書といった内容となつてゐる。

隆正にとつて五十音からなる言語を理解する上で重要と説くのは、第一に「あ」の持つ言葉の本義であり、次に自他をわける境界となる言葉である、「あ」と「わ」の関係である。これらを証明するものとして、様々な文献や、事象から「あ」と「わ」の関連性を具体的に列挙していく。

加えて、「わ」という言葉は漢字として「輪」が充てられると共に、「和」を示す言葉でもあると隆正は指摘する。「和」を守ることも「忠孝貞」のころを持つ上で忘れてはならない言葉であると主張しつつ、隆正は「わ」の持つ言葉の意味についてさらに論を広げていく。

以上のように、「あ」と「わ」を言葉の「本」として捉え、全ての摂理の真髓は「あ」と「わ」から導きだせると隆正は論を導いている⁽¹⁴⁾。

このように『音図神解』は一貫して「あ」と「わ」の本義の重要性と用例を列挙することに終始するが、一之巻下の前半にて、「あ」の本義と同じく、隆正が重要視したと考えられる「なげき」という言葉の概念について説明している。隆正は歎きの声と笑みの声を「あいうえお、はひふへほ、くみあへば、ゑみのこゑとなりはなれて長くひけばなげきの聲となること人のせさするにあらずして、おのづからしかいふもの也」となげきの声を規定する。また、「なげく」という声には、「なげき」の主体となる「われ」が持つ感情のバリエーションから「大人の心」と「小人の心」に区分けされ、それぞれの意味に違いがあることを、図を以つて理解させようとする。それに加えて、「なげく」という言葉から想起された古典や和歌を解釈する上で重要な用語を実例を挙げて語義解釈を試みている。「なげき」については『音図神解』以前に『ことばのまさみち』にて、他の大略を述べているが、『ことばのまさみち』を相述し、より詳細に「なげき」についての考察を試みていること、それ以上に自らが語学の集大成と位置づける『音図神解』に「なげき」の説を所収したことは注目すべき点であろう。

四、おわりに

以上、甚だ雑駁ではあるが、安政二年頃成立『音図神

解』についての若干の紹介と、隆正が『音図神解』に持つ、並々ならぬ感情を別本『音図神解』の存在から推察した次第である。『音図神解』のように、隆正の代表作とされながら、現在は等閑視されるテクストも、有る程度の意義付けを試みなければ、大國隆正の人物研究の完成を見ることは難しいと思慮する。『音図神解』は、政治論や経世論とはまた違った隆正の学問の一面を見ることが出来る資料といえよう。今後は、別本の『音図神解』の翻刻と紹介も視野に入れながら、隆正の言語に対する理解と、その学問的価値と位置付けについて更なる考察を試みたい。

註

- (1) 福羽美静の高弟である野村伝四郎は、『大國隆正全集 第六卷』(友光社 昭和十四年)の巻首にて、『古傳通解』を紹介する際に、「かくの如く高遠にして博大なる理想を説いた本書―他の音図神解と共に、先生の研究の二台根幹たるべき―」ものとして『音図神解』を隆正の代表作として位置づけている。
- (2) 一之巻上には「安政二年 六月」、一之巻下には「安政二年 七月」とそれぞれ跋文に書写年がある。
- (3) 蔵書印については後藤憲二編『新編蔵書印譜』(青裳堂書店 平成十三年)を参考にした。なお、校本印の「かむならふ」の方形朱印であるが、他に参照した学習院大学図書館本、國學院大學図書館本(國學院大學図書館貴重書原簿番号) 304、305にも確認された。この校本印については未だ閲覧していない他の『音図神解』諸本を閲覧する事を考慮に入れつつ、別途考察を試みたい。
- (4) 他の『音図神解』は、國學院大學図書館受け入れ年月日が昭和四十六年十月二十七日であることから、『国書総目録』への記載が間に合わなかったのではないかと推察される。
- (5) 國學院大學図書館貴重書原簿番号301、315。尚、安政二年頃成立の『音図神解』を除いて、現在國學院大學図書館のデジタルライブラリー(<http://kaiser.kokugakuin.ac.jp/digital/diglib.html>)にて閲覧することが出来る。
- (6) 内容は今回紹介する安政二年頃成立の岩瀬文庫本『音図神解』のものと同一であるが、文字が朱書にて訂正されている箇所が、岩瀬文庫本では朱書の通りに改められて書写されているところから見て、成立は岩瀬文庫よりも前と見るべきだろう。年月日などが付されていない為、この國學院大學図書館蔵本がいつ頃成立したものかは不明である。
- (7) 國學院大學図書館貴重書原簿番号301、303。丁数は上七十三丁・中五十七丁・下八十六丁。自筆稿本とされる。
- (8) 國學院大學図書館貴重書原簿番号306、315。自筆稿本とされる。この國學院大學図書館蔵本十冊本『音図神解』は一本義 三十七丁から始まり、二 阿行四十五丁、三加行 三十八丁、四佐行 三十九丁、五太行 五十二丁、六和行 四十四丁、七波行 三十八丁、八末行 二十九丁、九奈良無行 二十二丁、十也行 二十一丁のからな

り、十冊合わせて計三百六十五丁という大著となっている。

(9) 他に『音図神解』と名のつくものとして、厳密には学習院大学図書館蔵本の『音図神解総説』一・二・三もあるが、他の『音図神解』との位置づけなど詳細な内容検討は他日を期したい。

(10) 『神道宗教』第二百七号に掲載予定

(11) 例えば『神理入門用語訣』では五十音図について「今、世に五十音図といふものは、いにしへ言霊といひしものなり。古歌にことたまのさきはふくに、ことたまのたすくるくにといへるは、この言霊に天地間の神理、ことごとくそなはりて、わが日本国の神道をたすくる事のあるよしをいへるものになん。」と始めて、「これらのこと、くはしくは音図神解にいふべし」と結ぶ。このような誘導の仕方は、『音図神解』と同じく安政期に成立した著作に多く見られる。

(12) 『音図神解』一丁表参照

(13) 「あ」の本義を理解できなければ、本当に言葉を理解したとはいえないと主張する隆正の姿勢は、初期の著作である『矮屋一家言』（文政八年成立・隆正三十四歳の著作）巻末の「附録」からもわかるように首尾一貫している。

附録

すべてのこと、そのもとをあきらめずして。すゑにのみかかづらひをれば、わづらはしくのみありて、そのむねをえがたきものなり。ことはのみちも、又この理にもれず、五十の音、おのおのふかきころ

ありて、よろづのことば、これよりいづることなれば、五十の音のころを、よくよくあきらむるときは、よろづのことば、みな水の春にあふがごときものになんありける。この故に、いま「あ」のころをくはしくときて、ことのはのもとをあきらむる道を、ひとにしめさんとす。

いまは、あのころばかりあかす。のこり四十九の音もみなかくのごとくなるものなり。くはしくは『言霊叢』にいふべし。

「あ」
ひとつもの、ふたつにわかれ、わかれわかれてへだたりゆく。へだたりてあはず、あふべきすぢあり。いまわかれてあり。このゆゑにあはず。もとひとつなり。このゆゑに、あふべきすぢあり。これになん「あ」といふこゑのころなる。

（松浦光修編『大國隆正全集 第八卷 補遺』国書刊行会 平成十三年 六〇頁参照）

また、隆正自身も「あ」の本義に対する考え方が、『矮屋一家言』から一貫して違うことがないことを『音図神解』中にて次のように述べている。

あといふこゑのころ、つゝめていへばわれとへたてあり

にてことたれど、これをのべていふときハ、ながしきこゝろあるなり

ひとつものふたつにわかり、わかりわかれてへだたり

『音図神解』

凡例

- 一、底本は岩瀬文庫所蔵本を使用した。
- 一、翻刻に当たって、適宜字体を改めた。
- 一、改行は底本の通りに行った。

《一之卷上》

序一表

岩瀬文庫（方形印）

かむな

らふ（方形印） 校本印 羽田埜（円形印）

参河國羽田

八幡宮文庫（方形印）

序一裏

ちよりおと

おほき

ことはの

そのもとは

序二表

いつ、なりけり

ひとつなりけり

隆正

一丁表

ゆく、へだたりてあはず、あふべきすぢあり、いま
わかれてありこの故にあはず、もとひとつなり
この故にあふべきすぢあり」といふこ、ろをふく
ミて、なれることばなり

このことばおのれはたちあまりのころ考ええたる

ことにて矮屋一家言といふふミをあらハして

いひおきたることなるを、そのち年月考へ

こ、ろミるにこれにたがふことなし（二之卷下 二

十五丁）

確かに「あ」の本義に関しては『矮屋一家言』から変
わつてはいないが、「われとへだてあり」と一言で「あ」
の本義を説明した件は「あ」と「わ」の関係性を見出し
た『矮屋一家言』以降の著作での成果といえよう。

この「わ」と「あ」の概念は、『音図神解』と同時期に
成立し、『音図神解』と並び代表作として知られる『古
傳通解』においても、『音図神解』と同様に、「輪」と
「我」を円の中心として図示し、同様の論を説いている。

（國學院大學大学院博士課程後期）

（14）

人のものいふこゑさまへにわかれてあれど、つまるところハあいうえおのいつより外ハあらず、いかにいづるこゑも、長くひけバその長きに堪はずそのこゑを

うしなひて、あいうえおの五つにかえるをもて、これをさるとるべし、されはそのあいうえおの五つハ、あといふ一こゑをもとにしていづるこゑなり、されバあハいそ

一丁裏

ぢのこゑ、よろづのことばのもとにして、このこゑのこゝろよりあきらめおかざれば、わがくにの古言を

とくそのまことかなひがたかり、これによりまづこのあといふこゑのこゝろよるときはじむるなり、あハうえとはたらく、くだりのはじめにありて、そのはたらきにくはしからず、これによりいまだえぬところをさすことばとなれるものなり、いまだえぬ

により、われとへだてあり

二丁表

これにより、この詞をわれとへだてありととくことなり

このことばを、われとへだてありととくにつきてはわれといふことの、こゝろを、くわしくときおかざればときがたきわけのあるにより、まづとわれいふことこのこゝろよハしくとくべきなり、

わといふこゑのこゝろは、二百一の巻にくはしくとくべきことなれど、ことにひきあげてとくなり、

二丁裏

われのれハ、これそれなどのれに同じく、さしきだめていふこゝろのれなり、されバわといふひとことにかへしてとくべきなり

わがのがハ、きミがのがにおなじ、これをもてわれのれハそへていふことば、なることをしるべし

わといふことばに、我の字をあつるあり、輪の字をあるつあり、我の字をあつるもがらを輪にしていふところなれば、輪の字をあつるわにそのこゝろひ

三丁表

としきなり、これをかたるうつしあらハしてしるすべし



わのかたち、かくのごとし、いまも俗にも、かくのごときかたちをかきて輪といふなり

あ

わの外をあといふ

真言宗にては、金剛法相といひ、禪宗にてハ

一圓相と名づけ、儒家にてハ大極図といふものこれ

三丁裏

なり、わが古事にてハ、天の御中主神の神體もくはしくハ古傳通解をミてるべし

わの外をあといふ、いま人をさして、あなたといふわがたくひのいやしきものにあらざと敬ふこゝろ也

あなたハあのかたといふこゝろなり

古今^{雜上}あかずして月のかくる、山本ハあなた

おもてそこひしかりたる、新拾遺^{卷三}夏^{朝臣}の

よ八月こそあかね山のはあなたの里にすむべ

四丁裏

かりけり、これらのあなたハ眼にえざるところをいふ、人をさしてあなたといふハ、わがえざる徳をえてある人といふこゝろなり、わがえざることゝをえてあるに

よりわれとへだてあるなり

わといふハわが身ひとつをもいへど、わが身ひとつをいふはかりにあらず、わがいへ、わがさと、わがくに、わがくに、とひろめいふことばなり

わがくにといふに三つのわかちあり、國の君たる人

四丁裏

わがくにといふハ、わが一身にて領するこゝろのわが也

山城の人の山城の國をさして、わがくにといふハわがうまれしくにといふにハあらず、わがうまれしくにの人をひと輪にして、いふこゝろなり、日本の人の日本國をさしてわがくにといふハ、日本國の人を一輪にしていふこゝろなり

いまの世の人ハ、いにしへのことばづかひをしらずして、わがといへハ、わが身ひとつのこと、おもふめり、そはこゝ

五丁裏

ろもことばもいやしくなれる、いまの世の人、こゝろにて古意古言をしらぬものなり、今ここに古事記萬葉集等をひき出て、古意古言を、今の世の人にしらしむべし

萬葉集^五梅花歌三十一首^非序あり、目錄にハ、大

宰師大伴卿宅宴梅花歌とあり、序にいわく、天

平二年正月十三日萃^二于帥老之宅^一申^二宴會^一也と有

を見て大宰帥のいへにその部属の人のあつまり

六丁裏

てよめるうたなることをしるべし、主人大伴卿のうたに、わがそのにうめのはなちるひさかたの天より雪のなかくるかも、とよまれしはこともなし、大宰少貳小野の大夫といふ人のうたに、うめのはないまさけることちりすぎずわがへのそのに

ありとせぬかも、とよまれしを見るべし、わがへは、わが家といふことなり、少貳にして帥のいへをわがいへといへり、少監阿氏與島のうたに、うめの花ちら

六丁裏

まくをしミわがその、たけのはゆに鶯なくも、大典史氏大原のうたに、うちなひく春の柳とわがやとのうめの花ともいかにわかかん、算師志氏大道の歌に、はるのぬになくやくひすなつけん^{ナツケン}とわがへのそのにうめがはなさく、対馬^{タジマ}目^メ高氏老のうたに、うぐひすのおとさくなへにうめのはなわぎへのそのに

さきてちるミゆ、とあり、わぎへハわがいへといふことなりさてその少監、大典、算師、対馬目、ミナ大宰師

六丁裏

の属官なり、属官にして、そのかしらのいへをわが家といへるハ、その部属を一輪にして、その神属のもよりいふことばなり、今の世の人のこゝろにてハ、あやしくおもふなるべし、古意にかへりて見ればよく

わかりたることなり、



この外部属の人々、ミなこのひとわの
うちにいりてあるなりこれにより
わといへるもの二なん

七丁表

古事記故此大國主神之兄弟八十神坐云々故爾八十
神怒欲殺大穴牟遲神共議而至伯伎國之手間山
本云、赤楮在此山、故和禮共追下者とあるを
古訓本にワレドモとよまれ傳に和礼共の三字

つらねて和礼杼母と訓べし、我ども吾どもと書べきを
假字にたかき、そのうへに注までを附たるハいと煩はしきに
似たるを、記中に往々かゝることあるハ、たゞいと古き書に
かけるまてによれるにやと、うたがひおかれたるハさすが
七丁裏

に本居翁なりけり、しかハあれど、たゞいとふるきふミに
かけるま、によれるにやといわれしハ、和礼といふことばの
古意を得られざりしなり、作者の、かくこまやかに
和礼と、かなにてか、れ、以音といふ注までをつけられ
しハ、和礼といふことばをおもくきかせんためにて
われどもと、つづけてよむべしといはれしハ、作者の意
にかなはず、これハかの八十神たち、その八十神を一輪
にして和礼共におひくだらハとよませんとて作者は

八丁表



かくのごとく、しるしおかれたるなり、
八十神をひとわにしてわれとし、
大國主神をあ^とと見てころさんとし
たるものなりこれによりわれとこと
さらにたしかにいへるなり

あ

大國主神

いまの世の人ハ、そのこゝろ大かたいやくしく、わが身を
のミわれとして、人をもひとわの内にいれてわれ
とおもふものすくなしハ、そのこゝろにつれて、ことバも
八丁裏

いやしくなり、自身のことを、わたくしといふめり
わたくしハおほやけに對してわが一身にかたよる
こゝろをいふ、これを謙遜のことばとミれば、よろし
きに似たれど、まことに今この世の人は、わたくしの
こゝろふかれバ、わたくしといふことば、よくかなひ
てあるなれはしかわが身一つにかたよる道ふかきに
よりわれをいふことばをもしみて、人に及ぼ
さず、わが身のことのミいふめり、古人ハしからず、かの
九丁表
八十神など、悪神ながらに、そのひとむれをひとわ
にして、われといへるハ古意をえたるものなり
わが日本國中の人を一輪にして、わがくにといふハ

つねのことなり、いせものがたりにハ、わがミかど六十余國といへり、これハ漢語に我朝といふことのあるにより、それをやまとことばに、うつしたるものなるべし、されど、これハ、日本國をわがみかどのしろしめす一輪のうちといふこゝろにていへるものなり、**崇神天皇記**に、**九丁裏**

このミキハ和がミきならずやまとなすおほものぬしのかミしみきいくさいくさ、とある、わがハ顕露世界のものならずといふこゝろにて、わがミきならずとのたまへるものになん、

同言のかきりを、異言の國にむかへてわが國といひ、幽界にむかへて顕露界をわがといへるハ、わがといふことばのきハみなり、

十丁表

拾玉集慈願和尙みたれゆく世をミてたのめもろこし

をわがくに、なす住よしのかミこれハもろこしをわがくにのわのうちにいる、こゝろなり

わはかくのごとくひろくなることばなり、

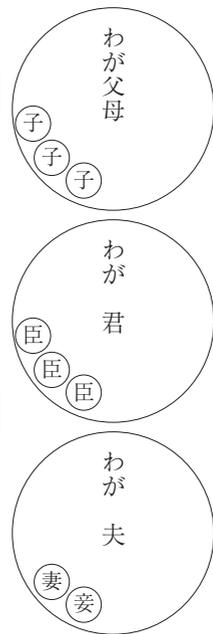
拾遺集ミてくらはわがにハあらずあめにますとこよおかひめのミやのミてくらは、とあるわがハ地球上をひとわにしてこれをわといひ、下界のものニあらずといふこゝろにて、わがにハあらずといへるものになん、これもまた

十丁裏

わがといふことばのいとひろきかぎりなりけり、

これをミてもわがミひとつをわれとおもふハくだりたる世のありさまとしるべきなり、いにしへハ地球上をひとわにしてわがといへるそのこゝろひろきを

おもふべきことなり
わが身ひとつをわれとおもへバ、ち、は、もわれといふコトばの外になるなり、ち、は、をばこのひとわの内に入れて、中点におきわが身ハかたへにしりぞきてたふ
十一丁表
とむべきことなり



きミはわが身ひとつの君にあらず、父ハわが身ひとつの父にあらず夫ハわが身ひとつの夫にあらず、君と父と夫とこれをおき、わが身ハかたへにしかず
十一丁裏

きて、兄弟姉妹あひたすけて父母のこゝろを、やすめたてまつるべし、將軍あひたすけて君のためにおもふべし、妻妾あひたすけて外こゝろなく夫によくつかふべし、兄弟あらそハず侍業あひそねまず妻妾あひねたまぬを、よしとする
ことこのからを見てさとるべし、

わといふこゝろに道のそなハれることかくのごとし
わの内をわといひ、わの外をあといふいにしへの博士、おほかたわがくにの古言に、支那の字義を、かむ
十二丁表

がへて合せたれど、あの字にあたる文字やなかりけん、あの字にあてたる文字なし、

和名抄國名のところに肥前の國の郷名に、

彼杵とかきてそのぎとよめるところあり、彼はかのとよむ文字なるにそのとよめるをおもへばあといふにも於彼の字をかきてよろしかるべし、されどそれにてハマギれやすければ、於外

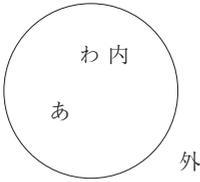
十二丁裏

の字を撰むべきなり

いまおもふに他の字をあつべし、他ハ字書に彼之称也とあれバなり、されど他の字はすでにヒトとよむ又字なるにより、又それにすぎるべし、旧字なれば、它とかきてわくるかたよりよからんこれによりこの書にハ它とかきて、あとよましめんとす、

十三丁表

いさ、か字義にたがひても、あてられる文字をつかふかた遍よりよきものなれど、これハあてられる文字のなきにより、せんかたなくかくいふ也、



人のゆるさぬものをとるハ禽獸なり、人のゆるすを

まちてとるハ人なり、これをあといふこゑの道とす、

十三丁裏

人とうまれ、わが日本國のことばをつかふものハこれよりただしく守るべきなり、いづれの國の教も

教はその國そのくにのことばよりおこるものにて、わか國のをしへは、あいうえおのあよりおこるとしるべきなり

仁義孝悌は、支那固有のことばなり、聖人はそれによりて、支那相應の道をおこされたり、

梵字ハ天竺のことばなり、佛ハこれより道を

十四丁表

たてけり、このことハ総説にいひおけり、父母にえられては、そのわをいづることあたはず、

その君にえられてはそのわをいづることあたはず、夫にえられてハそのわをいづることあたはず、このミつのわをよくまもるは人の道なる

これハつねをとくなり

しかはあれど、女とうまれてハ、ち、の家にいつまでもをるべきものにあらず、夫のいへにとつぐものなり

十四丁裏

そのとき、いままで、わがいへとおもひし、父の家をあのいへとし、夫のいへをわが家とするものなり
わとあといりかはるなり、をのこ子までも人にやしなはれて、人のいへをつぐときハそのごとく、あとい見しいへを、わが家とす、わがとおもひし家をあ
と見るものになん、

いにしへハ養子といふ事なりしにより、これを
あらぬまに、いふものあれど、いまの世にてハ、これも
十五丁裏

またなくてハ、いへのためるにより、せずしてかなハぬ
人倫の道となりてあるなり

その夫に、しにわかれなどして、子もなくその夫の
家いつまでも、をりがたくして、ふたたび親の家
にかえり、またその夫のいへをあつて、又親の家
をわとする事あり、その親の家もひさしく
をりがたくして、ふたたびミたびとつぐものあり、これ
もまたせんかたなきわざにて、おほやけよりも

十五丁裏

ゆるしたまふ人倫の道なり、

支那にて王獨といひたる人、貞女不更二夫一といひ
けるより、世のことぐさになりて、夫しにてのち
節をまもるをつねの道とす、わがくに、ても

神代より、わが夫おりに、をハなしつまハなし
といひて夫の、しにたらんのちまでも、まもりて外
のをとこらにあわぬを、つねの道とする事なれど、
さハなりがたき賤の身ハミたびもよたびもつぐ

十六丁裏

ことあり、それをあながちに人の道にそむける

ものといふべからず、抑人は書たふもののあるにより
いとわかきより標をまもりておはします

ものになん

おやもゆるし、おほやけにもきこえあげて、ふた、び
三たびとつぐハ、たゞこのあとわといりかはるまで

にて、神もゆるしたまふことなれど、夫ある身に
て、外の男にはだをけがすたぐいハ、あわの

十六丁裏

さかひた、ずして。神もゆるしたまハぬあしき

わざなり、女にしてこのさかひをミだるハいふまで
もなくあしきわざなるを、しかせさする、をどこ
もまたあわのさかひをみだる罪、人はゆるしても
神はゆるしたまふべからず、目には見えぬ、か
ならず、その罪をバ負うべきことになん、

延喜の説詞式に見たる大祓ののゆとにあまつ

罪、くにつ罪をかぞへられしなりに、人の妻おかせ

十七丁裏

る罪といふこともあらぬハ、おほやけよりつミしたま

ふ罪なればなり、公よりとがめもらしたまふ罪
を神ハつミしたまふことなり、

わといふこゑのこ、ろをな^ハくはしく考があるに、
得^ツといふこゑのつづなりてなれるものなり、されバ
わといふこゑはあつて見しものをえて内に
いたるこ、ろのことばなり、

五十音のうち、あいうえおのいつ、はもととなり、

十七丁裏

のこり四十五音のうちわあうゑをハ、あいうえお

に得^ツといふこゑのかさなれこゑ。やいゆえよは
あいうえおに得^ツといふこゑのかさなれる聲にて、
のこり三十五音と同じからず、

ウア (ウイ) ウウ (ウエ) ウオ
わ (あ) う (ゑ) を

(エア) (エイ) (エウ) (エエ) (エオ)
や い ゆ え よ

十八丁表

アイウ エオ

あ 得

ラリるれ口

十八丁裏

まるれと、仰ごとありければ「これ八月にえて
ねにえざるなり」

源氏ものがたりうせ戸をおしあくるに、

あれハたそとふ、まろぞといふ「これハ耳にえて
眼にえざるをいふなり、

宇治拾遺、こハいかにこ、ぞくと山しなも、す
ごしうつるハといへバあしこあしと見て関山もこえ
ぬ「これは眼にえてあしにえざるなり、

十九丁表

わが身をさしてあといへることなり、これハえられて、
えられざるをいふ、

えてえぬをいふあとおのづから反して対せり、
これハ、わが身を本としていふと、本を本として

いふとのたがひめなり、
わが身ハ父母にえられてうまれいで、君にえら

れてつかハれ、女ハ夫にえられて子をむむべくなり
いでたるものになん、されバ人とうまれ来ては、

十九丁裏

わがま、ハならぬものとするべきことなり、
ざるを、人ミなわがま、をせんとするにより

道をふミたがふるなり、わが國にうまれて、
わが國の古伝をおとしめしりぞけ、とづくに
のをしへをたふとぶも、わがま、なり、
その父母乃こ、ろにそむき、その天のこ、ろにたがひ、
その夫のこ、ろにかなハぬたぐひ、えられてえら
れぬものになん、

二十丁表

さることあるとき、わが身をさしてあといふなり、
あわ通音なるにより、わともあともいにしへハ
いへるものなりなど、これまでの先生たちの、と

かれしハ、いまおもへばあまりなるまで廉漏な
るころにてありしなり。しかハあれど、隆正世

に出ざりしうちの学者たちハ、ミなそれ
てことスミたるものなりき、

古事記上巻大くにぬしのかミ、そのきさき、すせり

二十丁裏

ひめのねたみをいぶせがり玉ひて、うからをひきゐて
いでさらんとしたまへるとき、むしとりのわがむれい

なハひけどりのわがひけいなバ、とのたまへるわがハ其
身ひとつのたまへるにあらず、そハむれいなバといふ

ことばにてさとのべし、ひけいなバはともがらにひか
れいなバといふこ、ろなり、一輪になりてたちさる

さまをのたまへるなり、そのときすせりひめの神の
こたへたまへるうたに、あがおほくにぬしこそは云々

二十一丁表

あハもよ、めにしあれば、なをきてをハなし、つまハ
なし」とよまれしハえられてえられぬこ、ろを

あらハしたまへるものになん、そのさきさきとなりたまへるはえられしなり、ミこ、ろにかなはぬハえられぬなり、大くにぬしのわがむれいなバ」とよミたまへるハミからをひとわにするわにて、すせりひめのあハもよ」とよまれしはえられてえられぬ心なりと

とくときハ、このかけこたへのこ、ろ、あきらかにしら

二十一丁裏

傳^{十一}にハたゞ通音とミられけんわあことばの
たがへる辨説なし、

源氏物語いできしころまでも、このこ、ろをつかひあやまらざりしなり、もミぢの賀のまき源内

侍のことをかけるところにあがきミくむかひて手をするに」とあり、これもえられてえられぬこ、ろをあらハしたるものになん、

二十二丁表

中昔のことばに「あがほとけたふとし」といふことあり、これをわがほとけとハいはざる例なり、これハ

帰依佛をさすことばにて、わが身をその帰依佛にえられたる身とし、えられぬかたやあるらんとかへりミて、いかにえられぬかとするこ、ろを見せて

あがほとけといへるものになん、

万葉集相聞のうたに、男も女にむかひておのか身をあといひ、女も男にむかひてハおのが身をあといへる

二十二丁裏

ことおほかり、女ハことに妻とえられ妾とえられても夫のこ、ろにかなハぬことやあらんとつねにあや

ぶミおもふものなり、これによりおのが身をわがといはずしてあがといふことおのづからのことになん、男もまた女のこ、ろやかはらんとあやぶむこ、ろよりことさらにわが身をあといひて女のこ、ろをとるものなり、これらハおのづからの人情とするべし、されどわがせこ、わぎもこなどハ、またあがせこ、あ

二十三丁表

ぎもこといはず、これハ一輪にいふこ、ろなればなり、それをまたその夫にむかひてハあかせのきみといふめり、わがせこ、わぎもこは他人にむかひていふことばなり、

これらの差別をわきまへて、古事をも見るべく古文をもかくべきなり

前もいへるわがおほきミ記紀ハ和賀とあるを万葉集にハ和期とあり、これハ賀於つづまりて

二十三丁裏

ごとなるにより、わがほきミといふべきを、このひびきのおをそへて、おのづからわがおほきミといへるハ万葉集いできしころのことばとしるべし、されバ阿賀

阿期などハ、かりにもいはざりしなり、これハえられてえられぬこ、ろをいふをりにつかはで人を一輪にいふこ、ろのときつかふことばな

ればなり、

あがとだにいへば、古めくとおもひてつかふハあや

二十四丁表

まりなり、
古事記云倭建命云々詔云阿豆麻波夜故號「其國」

謂「阿豆麻」也、日本紀云日本武尊曰云々吾嬬者耶
故因号「山東諸國」曰「吾嬬國」也

記にてハ足柄にてのこと、し、紀にてハ確日坂よ
りとありて同じからず

これハ橋姫の節に死したまへることをなげきて
よミたまへる一句の心うたなり、

二十四丁裏

これをいままで、うたなりといふものなかりしは、
うたのまことをしらざりしにやあらん、うたハ一
句にてもうたなり、二句にてもうたなりあなによ
し、えをとめをハ、五言二句のうたなり、これハ又一言
一句のうたにてありしなり、このことくはしくハ倭歌
格調辨にいふを見てしるべし、

夫婦となりたまへるハえられたるなり、人倫の、お
もてよりいへば、妻にて夫にえられたるものなれ、夫は

二十五丁表

妻にえられたるものにあらず、しかハあれど人情を
うちとして、うちよりいへば、夫もその妻にえられ
たるものなり、さてその妻、その夫をのこしおきて
節にしにたまへるは、その夫をえてえざりしもの
なり、倭健命ハ、たちバナ姫にえられて、あとに
のこりたまへるハえられざりしなり、さりて末ながく
かたミにえられえられてあらまほしくおもほし
けめ、われとへだであるあのまへまかりたまへるを、かな
二十五丁裏

しびわか身は、ひめにえられずして、あとにのこれ
るなげきをあらはし、ともに、あのまへもまかり

たぐおもほすまことをあらハして、あづまはやと
のたまへるものになん、

あづまハはなれあて、そのつまの心をおもふやり、
かれがためにわが身の它となりてあることを

なげきていふことばを知るべし、た、わがつまといふ
と同じからず、

二十六丁表

日本書紀 仁賢天皇の巻にも、吾夫阿怜矣時

云阿我因摩播耶といふことミえたり、阿怜の字
をそへたるを阿といふこゑにえられぬをなげくこゝろ
あり、はやといふこゑは歌息の意をあらわす
聲なるにより、かたゞ阿怜矣の三字をそへた
るものになん、

さてこの仁賢記の、こうた乃こゝろを因にかたる
べし、このミよのこゝろは韓人おほくわたり来て

二十六丁裏

ミだりがはしき風俗になりてありしこと、まこ
とになげくべきことにてありしなり、これも
韓泉郎^{クワンノウ}映^{ウキ}といふもの、鮎魚女^{アサヒメ}といふ女をめとり
て哭女^{ウキメ}といふ女をうませたり、その哭女ハ山寸^{ヤマジ}と
いふひとのつまとなりて、鮎田女^{アサヒメ}をうミたるなり、
それよりまへに山寸ハふなめの、後家になりて
ありけるにたハけて鹿寸^{カシキ}いふ男子をうませ
たり、されバ哭女ハ鹿寸のためにハ異父の姉な
二十七丁表

るべし、扱その山寸、その子をめとりてうませたる
鮎田女と其母にたはけてうませたる鹿寸と異

母兄弟にてそのふたり夫婦となりたるなり

韓泉郎映といふ名にてもしるべし、そのしろす

三韓人おひたしくわが國にわたり来てすみて

ありけれバ、かの三韓のあしき風俗をつたへ我國

にもかかるミだりなる事の多しハかへすくも

なげくべき事にてありしなりこ、にその夫の籠す

二十七丁裏

三韓にわたれるをなげきて、そのつま飽田女、お

のが系図をいひあらハし、おもにもせ、われにもせ

わかくさのあがつまはや」といひてなげきしもの

なり、これハ母にハ異夫兄弟、我身にハ異母兄弟

にして夫なりかくまでしたしきなかなれど

わかれて、すめバ、かれよりハ它と見らるべく、一たび

妻とえられて今えられずある身を、あといひ

そのあがつまと夫をしたふこ、ろをあらわして

二十八丁表

あがつまはやといへるなり、いまの世に穢多

とよびなすものはかかるもの、子孫にしてミ

くにの正しき人ハそのかミより、いやしミうと

ミしなり、いまハ人にして人ならぬものにたち

であるなりゆめくか、るミだりなることを、わが

國の古風となおもひそ、

すべて、わが身をさしてあといふハかれにえられ

て其輪のうちに入りてハあれど、えられぬかたあ

二十八丁裏

りて它とみらるべくおもふときこなたよりわが身

をさしてあといふハかれがこ、ろになりていふこ、

ろなり、されバあれとわれとハ、同じくおのが

身をさしていひながら、そのこ、ろいたくたがひて

あるなり、

わがくに、わがおほきミといひて、あがくに、あが

二十九丁表

ひろく他人に対していひ、さらでも、おほやけに

いふときハ、わがせこ、わぎもこ、といひて、あがせこ、あぎ

もこといはず

允恭天皇紀和勢故がくべきよひなり、

刀薙九このしくれいたくなふりて和藝毛故に

ミせんかためにもミちとりてむ

男どちしたしき友をさしてわがせこといへること

あり、これもまたあがせこといはず、これハ友とわれ

二十九丁裏

とを一輪にしていふこ、ろなればなり、

刀薙九ちきにひにしかしあそはねはしき和

我勢故、また、しくらかバ世をたづねつも和我世故ハ

うかハたらさねこ、ろなぐさに、これハ朋友をさし

ていへるなり、

刀葉略解に我大王と文字にてかけるたぐひを、

あがおほきミとよミ、かへりてハ、吾君とあるをわぎミと

よめるハミだりなり、これハあぎミとよむべきなり、

三十丁表

そハ古事記日本紀に阿藝とあればなり、あぎは

あぎミといふに同じ、

万葉六はるくさハのちハうつろふいはほなすとき
はに、いませたふとき吾君、阿あきつのはそで
ふるいをも、たまくしげおくにおもふをミたまへ吾
君、阿青山のミねの白くもあさにけにつねに
ミれともめつらし吾君「これらなり、
またしたしみて、あごといへる古言あり、神武天皇紀

三十丁裏

阿誤豫阿誤豫とあつはあごよくとよびおこして
これをミよとよミたまへるなり、万葉九わがおもふ吾
子まささくありこそ、阿九いふくとふ國にまさりて
おもへりし安我子にハあれど云々かくこひハおいつく
安我未けだくあへむかも「これらのあハ愛しおもぐ
あまり、えられてえられぬこゝろになり、いかにもし
て、ともにありたく、こゝろにさからハじとおもふましに
おのが身をあといひてあごあがこなといへる

三十一丁表

ものなり、

建保の職人盡歌合のとこバがきにあごようくだ
もてこ、とあるをミれば、そのころまでもわがこし
たしミ、愛して、あごといふことの残りでありし
なり、

又ともどちらにて、わがせこと、いへるたぐひにて、あせといへる
ことばあり古事記にひとつまつ阿勢衰とあるハ
これなり、これハ、阿藝といふに同じく、いたくし

三十一丁裏

たしみていふこゝろなり、はなれがたきこゝろを、あら
はしておのが身をあといへるものなり、

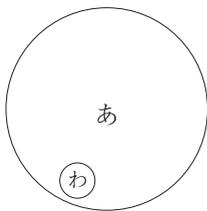
和阿の差別大かたかくのごときものなり、なほひ
きいで、いはんとすれば、いと多くわづわはしき
により、はぶきつ、記紀万葉をとりいで、かた
はしより見たふべしこゝろをつけてみたまひたらん
にハいくらもあることばなれば、おのづから其差別
をさとりたふべくなん

三十二丁表

この和阿の差別は、人情のおのづからしることを、あ
らはせることばにて、えてえぬをいふうらに、えら
れてえられぬをいふ、ことばのあるも妙なり我它
の差別は、一身よりおこりて、天地におよぶことば
なれば、いと大きいとひろし、おのが身をさすあ
人の情の、くまをさぐることばにて、いとこまかく
いとくぢし、これハ大小精廉をいひわくる、ことばの、
はじめにて、よろづのことばハ、これにつきて、おこるこ
三十二丁裏

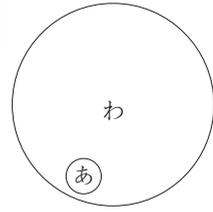
と、しるべきなり

人はさばかりのものはおもハざるべし、たかミむ
すびのかミの、むすび置たまへることばに、さばか
りの妙理なくてやあるべき



あはひろく
我はせばし
我ハ它のうちに
あるものなり

三十三丁表



わがくにわがきミなどいふわ
はひろく、あがミハせばし

我ハ我のうちに

あるものなり

わあいらりはるかたちかくのごとし

以上它の字を、あつるあと、我の字をあつる、あ
と同じこゑにて、彼此のたがひある、そのわけを
わきまへたるなり、

三十三丁裏

人の世にある、くひものによりていのちをつくぐものなり、
そのいねをつくるに、はるハ田にあをつくり、そのうち
をなはしろにして、たねをまくなり、おひたちた
るをう、るとき、あをもて、さかひをたがめ人の田、
わが田をミだらす、

畔の字をかきてあとよむハ、われとへたである

こゝろにて、人の田、わが田を、わかつを、むねと
することばなり、

三十四丁表

古事記、於^レ勝佐備^一離^一天照大御神之營田之阿^一
此阿字以音とあり、これを神代紀に春則毀其畔^{此云とあり}
り紀に春則とあるハ具につたへ、記にそのことば
なきは、はぶけるなり、あをつくるハなはしろ
につきてのことなり、あハなつもまた苗代のあ

をはなつなり、その證ハ、ミつね集にこのめはると
きになるまで苗代のあとだにいまだつくらざり

けり、順集あらさしとうちかへすらんはるの田のなは
三十四丁裏

しろ水にぬれてつくるあ、偽本柳本集はるの田の、
なはしろとこ、ろつくるとて、あはけふよりぞせきハ
はしむる、これらをミてあハ、あぜの本語成ことも
あをつくり、あをはなつハ、苗代につきていふことばなる
ことをもさとるべし、

記紀の文にては、あをはなちと、よむべく見ゆ
れど、古語拾遺に、毀畔古語阿波奈知とありて、大
祓の祝詞も延喜式に畔放とかきてあれば、ををす

三十五丁表

て、あはなちといふべきなり、
このかちさびの悪行ハ、人間界をたてさせじとし
たまへるものにて、青人草くひていくべきものに
さまたげをなしたまへるなり、なはしろのために
あをつくるハ、ひと、せの秋のたのみの、そのはじめ
なれば、これをはなつ時ハ、其おねを、うしなふこと
なり、これにより、はるハ、さるわざをししたへるなり、
今の世の学者ハ大かた本語畧語の差別を

三十五丁裏

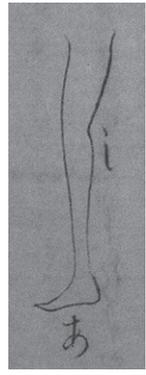
わきまへずして、あをあぜの畧語と、とくめり
畧語にあらざ、あとといふが本語にてぜハそへたる
ことばなり、そへていふこゝろハせくこゝろの世なり
ひとすじをあといひ、たてに、よこにかさなれるを
あぜといふ、されバあとあぜとハ、さすところ

おなじからず、和名抄畔田界也、和名、久呂、一云阿世とあれど、くろと、あぜとは、さすこ、ろ同じからず、くろハくるむこ、ろにてとりまはしたる三十六丁表

あをいふなり、これもまた内外をわかつものにて、われとへだてあり苗代をわれとして、われと、外の田とのへだてをなすものハ畔なり、

苗代を一輪にしておもふべし、又あしのうらを、あといへることあり、これをもあしの畧語とおもふはたがへり、あしの本語ととくべきなり、

三十六丁裏
しは長くつゞくをいふ



あはあしのうらをいひて、しハ長くたちのびて腰につゞくをいへるなり、そはふとふしとの差別のごとし、とふのすがとも、なくふにハといへるふも、こものあミめをふといひて其間をふしとするなり、たけのふ、たけのふし、此さだめ也
三十七丁表

しかおもひさだめてのちに、あといひあしといへる古語をあつめてさとするべきなり、

あしをふみてうらなふをあうらといふ、あしにてすることなれど、あしのふミにて、うらなふことなるによりあしうらといはずしてあうらといへり、万葉につくよにハかどにいてたちゆふけとひ足下乎曾為之ゆかまくをほり、同じつくよミかどにいてたち、足占為而ゆくときさへやいもにあハさらん、

これら足の字はかきてあれどあしうらとハよまれずあうらといひしこといちじるかり、また万葉しまつたふ足速の小舟、とよめるうたあり、舟のうらをあとへるなり、あしのうらをあといへるに同じ新撰字鏡腕阿加久とあり、あしのうらにてかくやうに、馬などのはしるをいふ、

あしづりなどハあしにてすることなるによりあずりといはず、よく見わくべし、

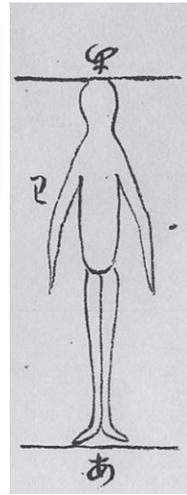
三十八丁表
人身の上下にあとさすところあり、下ハあしのうら

をいふあ、これなり、上ハあたまのあこれなり、
和名抄 形部、頭面云頓會一云天窻 和名
太萬とあり

あたまのあハ上のしきりをいひ、たまハそこに人のたまハあるものなるによりて、たまといへるなり
天恩は見聞のたまるところなり、身のミ中
にありてまがるをためなほすところなり、
三十八丁裏

これによりたまといふ
あたまと、あうらとハ上下の対にて、これより内を

わが身とし、これより外を它と見るところに
なんありける、



われとへだてありとくことばにかなへり、

三十九丁裏

これらのころを合せ考ふるに人のうまる、はじめ、
あといふこゑのこゝろにてうまれいで、又あといふ聲
のこゝろにて、しにゆくものなり、しかありて
ひとよのかぎり、あといふこゑにつかハれてあるも
のになん、いでやこのこゝろをくはしくかたりてん、
人の母のはらにやどるのはじめ、こゝろハ身をえて
わが身とおもひ、みはこゝろをえてわが心とす、身
とこゝろとの外に、なるもあることなし、生れいづる
三十九丁裏
までかくのごときものなり、これをえてえざるあ
のこゝろに、おもひあはずべし、いかにもえてえざる
ものになんある、生まれいづれば、母の乳をけに吸、
父のつくらせおけるきるものを身にえてそだつなり、
心と身との外に、えてわがものとするはじめは、うぶ
ぎと、乳しると、このふたつなり、その外ハミなあ
とミるものになん、このちしると、きるものとはじ
めにて、あれをえん、あれをえんと、一よのかぎり

四十丁表

それにつかはれて、しぬるときハ、そのひとよのかぎり
えたるものを、あとにのこして、あと見なして
すぎゆくものなり、これをもてあにて生れ
あにてしぬるそのあいだ、あにつかハれてある
ことをさとるべし、

佛家にて阿字本不生といふ、天竺にては、ふし
むなしといふ倭語にあたることばを、阿といふ
なり、わがくにのあと、そのつかふこゝろ同じからず、
四十丁裏

阿字、いまの杭州音にてはオなれども、いにし
へはアにてありしなり、日本音に、支那の古
音の残りであることこれが色あり、ひとむき
に、いまの唐音をただしとて、わがくにの漢
呉両音を非とする儒學者もあるハ、いにし
へに、くらきものなり、今日本、支那にて梵語を
釋したるいにしへの三藏たち、阿を無、又空と

四十一丁表

訳したり、阿は梵音をうつし、無ハその義を
うつしたるものになん、音をうつしては阿弥陀
とかき、義をうつしては無量壽といひ、又音
をうつして阿耨多羅とかき、義をうつして
無上といへるたぐひこれなり又アホキヤを
うつして、不空といへるたぐひアを不とも、う
つしたり無と、うつしたるものに、かはらず、支
那にて、阿といへる音のこゝろをかむがふるに、
四十一丁裏

かげになるこ、ろなり、丘阿の阿本義にて、阿衡の阿もかげによりて、おひらかにはつるこ、ろ、曲従を阿といふも、かげにてこ、ろをとり、おもねるをいふ、あつまやを四阿といふもの、きはのかげのおほきこ、ろ、阿堵物の阿、子供の名に阿某といふ類、かげにて愛するこ、ろなるべし、いづれも倭語にてくまといふことばにあたる、阿を本にして、それよりうるれるものになん、日本

四十二丁表

のあのこ、ろは前にときおきたり、さてこの三つを合せ考ふる日本語のあもろこしに、うつりてハ、くまをいふ心となり、天竺にうつりてはむなしきをいふこ、ろとなりておのくその國體をあらハしたるものになん、これによりてまくまと云倭語のこ、ろを考ふるに、くまは幽頭のさかひをいふことばなり、くまといふけだものあり、これハ黒きものにて、のむどのところにて、

四十二丁裏

いさ、か白きくまあるなり、これにより、これをくまといふなるべし、神米をくまといふ、これはくまにそなふるものなれバなり、このくまハ文字をつくりてあてたらんには、幽門といふべきところなり、かの大くにぬしの神が八十阿手にかくりてさもらひなん、とのたまへるやそくまでのくまこれなりき、大くには大地球のことにて、地の色ハ黄也ぬしは帝なり、この神靈 支那にわたりて黄帝

四十三丁表

とあらハれたまひ、蒼頡におほせて文字をつくらしめ、つひに日本國にわたして日本の用をなせり、これもその八十くまにかりてさもらひたまへるミシわざのひとつなり、これらハ吾祓のうちにていふことにて、儒學者のうけひかぬこと成べかし、さてその支那にて大道とたつるミち、わが國の眼より見れバ、阿おほかり、堯舜湯武ハ民に阿りて國王をあらためた

四十三丁裏

る人なり、そのときの舜禹湯武につかへたる諸侯諸民また故主をすて、新主に阿りつかへたり、上ハ下に阿り、下ハ上に阿りて、事ハ成りたるなり、事の成りたるにより後世これを聖人とあふくなり、これもまた儒學者のうけひかぬ説なるべし扱のちも臣下勢をすて故主をあらたむれバ、國中こそりてその新主におもねりつかへてはぢをしらず、蒙古韃靼

四十四丁表

より入り來れるものにも、また國中の學者阿りつかへてこれを新主としそれにつかへて、はぢとせず、これミナ國體のしからしむる事にて堯舜湯武そのはじめをなしたることなれバ、それをバこ、ろよくいひなしながらも、ことにいたりては、儒學者もげにおもひあたりてわか日本國のたふときことをおもひしるべきなり、さてまた天竺のことをいふべし

四十四丁裏

かのくにの阿字は無むの義ぎなるによりせるる王をたふとまずして、法王をたふとむ也、そはよく阿字のこ、ろを得て、造化を

益になし、平等利益をおこす人なればなり、いまはその天竺の地にても、佛道は

たたくくになりたたとときく、無字、不字、空字、のこ、ろにかなへり、聖おもふに、天之御中主のなかハ、中處といふこ、ろにて、なといふ

四十五丁表

ひとことにはやく中の字の義はそなはりてあるなり、さてそのなといふことばに、な、なく、なきとはたらくことばあり、支那の無の字に

あたり、天竺の阿字のこ、ろにかなへたり、天竺にて中を阿字の本體とす、されバ天竺の阿字は、わがくにのなといふこゑにかなひてあるなり、しかハあれど天竺のあは無の義をむねとするにより、つゝにその法さへその

四十五丁裏

國にたえたり日本の阿はわをはなれて

たかきこ、ろあり、地球上万国を一輪にして

その輪の内にありながらぬけいのでたふ

ときにより、あとあがむべきよしある國也、

もろこしのあといふこゑにしたがふこ、ろ

あり、つひに支那は、わが日本國にした

がひ属する時あるべし、天竺のあにむなし

き義あり、つひに天竺ハわが日本國にその國

四十六丁表

をむなくしてたてまつるものたるべし、

あにてうまれ、あにてしに、ひとよのかぎり、あにかはれてあることばこそうまれ、その實事にかたりては万国たがふことなし、あと見しものを身にえあと見しミチをこ、ろにえてわれをこやす、

あと見しものを見にうらハ金銀財宝妻子

眷属、田宅山野のたぐひ、ミなあと見しものも

四十六丁裏

ゆづられて得、もらひて得、かひてうるものなり、ミチハをしへられて、うるものなり、わがくにのいにしへ、儒道も佛道もあと見しものにて、

わがくににはなかりしものなり、そのあと見しミチの、わがくに、わたりてよりこのかた、人

ミなそれによりてわがくに異國の古事古

言のその義理にいたりてはたれもあと見て

わからぬ事に、今の世の人はおもふなるべし、

四十七丁表

聖これをときて、今までハ、あと見たりけん

本教神理を、人にさとらせ、その人とのわが物に

せさせんとす、

あたまハあめにひかる、ところなり、あしのうら

は、つちにひかる、ところなり、人の生る、はじめ

あたまを、つちにむかへ、あしのうらをあめにむかへ

てうまれいづるものなり、うまれてひと、せほと

たつうちにあしのうらをつちにつけて、あたまを

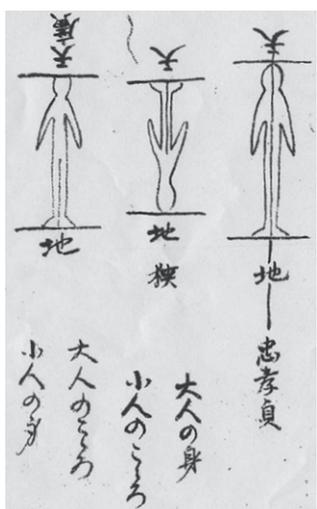
四十七丁裏

あめにむかへてたつなり、これをもて、さとるべし、ひとのこゝろの、そのはじめおこるときハ、つちにむかひてせばくわか身のためにおもひ、のちにおもひかへして、人のためにおもふものになん、ひとのためにおもふを天にむかひてこゝろのひろくなれるなり、家にあ

りては父母をおもふ、いで、つかれバ君をおもひ、女は夫につかへてわが身をわする、ものなり、この心ふかきものを人ハすくれたりとす、これハその

四十八丁表

なかをうまく得たるものになん、身は地にむかひて生るゝものにしあれば、せばく、



四十八丁裏

ひくゝもちこゝろは天にむかひてたつものなれば、ひろく、たかくもつべし、しかしてあひつらぬく忠孝貞のこゝろをわするべからず、これを大人のこゝろにて人身の神生にそむかぬ、天地自然の道也、小人のこゝろはこれに反して、こゝろハ地にむかひてせばく、

おのか身のためをのミはかり、身ハ天にむかひて高く、おどりほこらんことをのミおもふ、しらして忠孝自のこゝろにうときものなり、

四十九丁表

この道理にあきらかなるものを、よく道を得たるものといふべし

されバあ|とさすところに、おのづから廣狭のたがひあり、足のうらより下のあ|ハつき|にせばくなりて、おのが身のミ、利益をひきつけんとするものにて、つひによみのくにのいときたなきにいたるものなり、あたまよりうへのあ|ハ、つき|にひろくなりてよのためひとのためにおもふものなればつひにたかまのはらの

四十九丁裏

あまねく世をてらすその徳におよぶものなり、こゝろえたがふれば、おごりたかぶるこゝろとなるつゝ、しむべきものになん、

五十音図のこゝろと、神代の古事とをあはせて、今日眼前の道理をかむがふるに、いさゝかもたがふことのあらむものになん、

人のこゝろのおごととき、まづおのか身のためをおもひ、のちにおもひかへして、人のためにおもふとしけるは

五十丁表

人情をいへるなり、大人のこゝろになり得たる人は、はじめよりおのが身のためをはかるこゝろハあらざるべし、されど大かたの人のこゝろハ、さハとゞきがたきものなるにより、大かたの人のこゝろにつきていへるなり、小人をはぢ大人をねがふハ、人のこゝろのまことにて、

そのこゝろあるものハ、小人のこゝろをあらためて、はやく大人のこゝろにうつるべきものになん、

荀卿が性悪ハそのはじめを見て、それを性といへ

五十二丁裏

るなり孟軻の性善ハそのもとかへるを見て

それを性といへる也、宗儒のいはゆる本然の性ハ、佛

家にはゆる本真心なり、氣質の性ハ五欲八風

是也、華嚴の安盡還源觀ハ儒家の大學の

明明徳にかなへり、これらの事をしるハかたちなき、を

しへをかたちなきこゝろにうるものなり、それらの

書を見ざるうちハ、ことごとくあなり、それらの書

をよむときハ、わが本有の心に合せて、われを

五十一丁表

ひろむるもの也、われをふとらしむるなり、しかハ

あれど、儒佛西洋等の書をよむに、そのよむ

ムちを得ずしてよめバ、そのおしへに惑ふべし、

今その法をしるすべし外國の書ハすべて、上

よりよむべきなり、下よりよむべからず、今の日本

人大方外國の書を下よりよむにより、其書

に惑ふなり上よりよむときハまどはずして

益をうる事多きものなり、上よりよむとハわがこゝろ

五十一丁裏

を上るおきてよむことなり、こゝろをかみに

おくとハ、高慢我慢のこゝろをいふにあらざ、

われは 皇統のたがハせたまハぬ日本國の人ぞと

いふこゝろを上におくことなり、孔子も釈迦もその

人こそ聖佛なれ、日本に生まれし人にあらざと

おもひてよむべきなり、隆正がごときいかでその
聖佛の大徳におよぶべき、しかハあれど、日本國に
生れて、五十音図になれ神代の古事をしれる

五十二丁裏

により、聖佛のいまださとらざりし事をいふ也、

日本國に生まれし身こそうれしかりけれ、

田のさかひをあといふハ、身にものをうるはじめなり

五十音のはじめにあといふこゝろあるハこゝろに道

をうるはじめなり、これを一對にして、おもふべき

ことなり、身にうるものさまざまなれど田よりいづる

稲をもとにして外のものを合せうるものなり、その

稲のいづるところハ田にして其田のさかひをわかつ

五十二丁裏

ものはあなり、畦に心をふかくいれて、いにしへよりの

みづきもの多寡、外國の時世云々、ところごとくの

制度をも、あつめ考へて一書をつくりおきたらんにハ

浮き世のためよろしきことなるべし、

おのれハ、古事古言の大すちをとくことにか、

りていとへなけれバ、そのあたりまで力及バズ

いかでさるふみをつくりおく人もがな、

踏
音図神解一ノ上令門人
開正當書寫一校之
(丁末に「幡本文庫」方形印)

安政二年六月 野之口隆正(氏名中心に「たかまさ」方形印)

《一之巻下》
序二丁表

岩瀬文庫（方形印）

かむな
らふ（方形印） 校本印 羽田埜（円形印）

参河國羽田
八幡宮文庫（方形印）

序二丁裏
えず入らず

へたて
あるかたを

いふ
こそそ

序二丁裏
われに

なりゆく
はしめなりける

隆正

序二丁裏

一丁表

音図神解一之巻下

野之口隆正著

あいうえお、はひふへほ、くみあへば、そみのこそとなり
はなれて長くひげバナげきの聲となること人

のせさするにあらずして、おのづからしかいふもの也

（あ）は （い）ひ （う）ふ （え）へ （お）ほ

あは、いひ、うふ、えへ、おほ、

一丁裏

あア いイ うウ えエ おオ
はア ひイ ふウ へエ ほオ

いづれもなげくこそなり

このことハ総説二之巻にもいひおけり、合せかむ
かふべし

なげくにふたつのこゝろあり、わがこへをおもひて
なげくと人のうへをミてなげくとこれなり、人の
うへを見てなげくに、又ふたつのこゝろ有、ほめて

二丁表

なげくと、あはれミてなげくと、これなりあはれむに
また、ふたつのわかちあり、えざるをあハれむとえられ
ざるをあわれむとこれなり、わがうへをなげくにも

また、このわかちあることとなりなげくといへば今の
世輩人ハうれふることのミおもふめれどよろこび
てもなげくなりなげくといふことばのもとを考

ふるになげなぐるとはたらくことばよりいで、
投息ナゲイキのこゝろなり、むねにせまるを、息と、もに

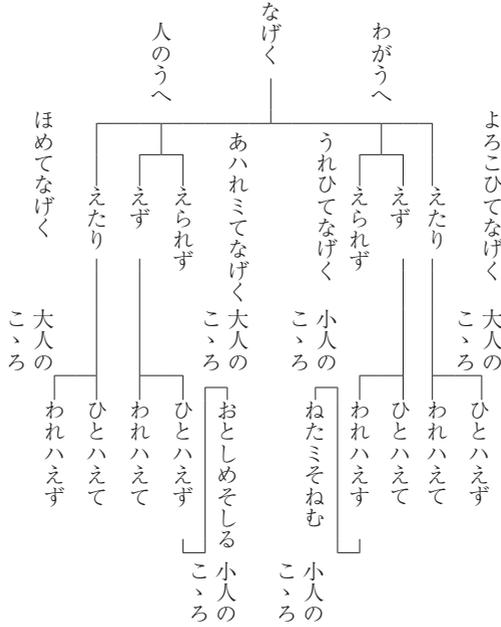
二丁裏

投出して、むねをはらするにより、投息ナゲイキといひて
それをまたはたらかしてなげかん、なげきて、なげく

なげ、どなどいふなり

先達は長息ナガイキととかれたれど、ナガイキ、約まれば、ナギキとなりてナゲキとはならず、投息ととくかた義理もよくなひて、ことばづかひのすぢもまさしけれハかくいふなり

三丁裏



三丁裏
この図のこゝろをとくべし、わがこへをうれひなげくハ小人のこゝろ、人のうへをあハれミなげくハ大人のこゝろとわけたれど、まことハ、大人もわが身を、うれいなげくことあり小人も人のうへをあハれみ、な

げかざるにあらざ、このふたつハなべての人のこゝろにそなわけてある道理なればなり、しかれども大人はそのこゝろひろくして、わが身をうれひなげくゆるげうすく、人のうへをあハれミなげくこと、ふか

四丁表

きものなり、小人は其こゝろせばくして、わが身をうれひなげくことふかく、人のうへをあハれミなげくことあさきものなり、これにより、その浅深につきていへるものぞ、えられず、えず、えたりとこの三つを並べあげたるハ、胸にせまりて思ふこと此三つなり君、父、夫、朋友、にまことをつくしてもそのこゝろにかなハす、えられぬ胸にせまるえまくほりしてえざるとき胸にせまる、人の人

四丁裏

にえられぬを見て胸にせまり、人のえぬを見て胸にせまるもまた人情なり、人はえてわれはえざるとき、ねたミそねむハ小人のこゝろなりわれハえて、人はえざるとき、おとしめ、そしてるも小人のこゝろなり、人ハえざることとをわれハえてよろこぶハ、大人のこゝろなり、そのとき胸にせまりてよろこぶうれしなミだのいづるにひとしく、その時なげきの、聲をいだし

五丁表

ものなり日本國に生れえざる人をあわれみ、わが日本國にうまれえたることをよろこぶときむねにせまりてよろこばしく、あうれしやといふたぐひ、大人のこゝろなり、

又學術の

すぐれたる人、藝術のすぐれたる人を見て我ハえず
我ハえぬ事を、かれハよくも、えたるものかなと
むねにせまりてほむるとき、アしたりと、なげ
く、たぐひ大人の心なり、

五丁裏

論語等其外漢籍の古訓に嗚呼等の文字を

アとよめるハ、字書に歎聲とあるによりてなり

わが古書には、アといへることハ見へず、あな あなや

あや あはれなどいへる事であるなり、アといへるハ日本

書紀にひと、ころ、阿阿しやこしやと、あるばかり

なりそれハあざけりわらふなりと、注してあり前因に

あはせて、とけバ、われハえて人はえざるにより、おと

しめそしる小人のこ、ろよりいづるなげきの聲

六丁表

なるをこ、にあげたるは 神武天皇のあふれミ

おもほしけん 皇軍大悅呼^レ天而咲とあるを見れば

軍卒どもの、したることにて、わが 皇軍にしたがひ

て利をえたるを、よろこび、かれが 皇軍にそむき

てうたれたるをおとしめそしりてあざけりわらひし

なり、おとしめそしるハ、小人の業ながらこ、ハ、大やけ

のことにしてワたくしのことにあらずその文の

つゞきに、因歌之曰、いまハよ、いまハよ阿阿し

六丁裏

やを、いまだにもあごよ、いまだにもあごよ今來目

部^ガ歌而後大晒、是其縁也、とあり、いまこ、に

この一首のこ、ろをとくべし、今はよといふハ、成功

の時をいふなり、いまだにもハ未然の時をいふなり

さてその間に、はさまれて阿々しやといへるハ、わが
道をえたるをよろこびかれが、ミちをえざるを
あふれむ、そのこ、ろの、むねにせまりてあらハれ
おる聲なり、私記に阿々を咲声と注してあれ

七丁表

ど、まことハわらふ聲にハあらざるなりこのうたを

うたふ前後に大きにわらへるものなりよく

こ、の文意を見わくべし、今成功のうへにて

はいちじることなれど、われらはいまだしき

うちより、けふの、かちをしりて、ありしなりかれハ

それをしらざりしものなりと、歎じて、阿阿と

いへるなり、古事記には疊疊しやこしやこの

者、いごなぞ阿阿しやこしや此者嘲咲者也と

七丁裏

とあり、えもなげくこゑなりアもなげく

こゑなり、いまもえとなげくハ人のえざるを

もどかしくおもふときいづる聲なり、アは

人のえざるを、あはれむときいづるこゑなり

子供をつれて池のほとりをゆく、おばなどが

エ、アルカヌカイ、ア、アブナイなど、おのづ

から、いづるこゑなり、ともにむねにせまるを

八丁表

これによりておもふに、いごのふは、もどかしくおもふ

こ、ろなるべし、いごハいがむのうつりにて、うち

いがめてもおよばはせんと、おもふこ、ろなるべし

ひゑねとあるつゞきを、おもふに魚こふものに

多くきりとりてやれかし、エ、もどかしや、かくまでも勝利をえたるものかなアアうれしやといへるこゝろならん

このうたのこゝろハ古詠格調辨にとくべし
八丁裏

○あな

古事記に阿那迹夜志とあるを日本紀にハ、意哉美哉、妍哉、などかきて此云阿那而惠夜とあり 神武天皇卷にハ妍哉此云鞅奈弭夜とあり 今おもふに、歎く聲はミな助くる聲にてことばの外なり歎くこゑを出していふことばのこゝろをふかく人にきかすものなり、これにふたつのわかちありて上におくと、下におくと大かたその

九丁表

さだまりあり、あは上におくなげきのこゑなりなハ下におくなげきのこゑなり、ミせばやなのなどこれなり、ほととぎすかな、などすべてかなのなハ下におくなげきのこゑなり、これによりて、おもふにあなハ下におくなげきの聲をひきあげてあにつけ、あなとい、おきて、扱のち、その間にいふべきことばを、あいふこゝろなるべし二神唱和の阿那迹の迹を記傳には、意の字等にあて、とかれ

九丁裏

たれど、考據なし、たゞ日本紀の字面によられたるのミなりいまおもふに、万葉八にをとめらがかざしのために、ミやびをがかつらのためと、しきませるくにはたてに、さきにけるさくらのはなの

にほひはも安奈何」といふうたあり、これをあやにといへることばのあるに、合せ考ふるに、あやにには、てにをはの、ににてあなにめでたしといふこゝろなるがそのめでたしと、いふことばを、にといふことば

十丁表

にこめていひのこし、ふかくめづるこゝろしらせたるものなりあなにやしあなにハともあれ万葉のあなにハそのこゝろなり

万葉の安奈何を、宣長翁ハ、何ハ荷の誤ならんといはれたれど、奈何の二字を、義訓と見れば、誤字とせずしてなにとよまる、なり、一本、阿奈尔とあるによればこゝろもなし

十丁裏

いまひとつこゝろミにいふ考あり、阿那迹ハ歎息のあなにはあらで、穴瓊のこゝろなるべし、下照姫のうたに、阿那陀麻と、たをにこりてあれバ、かれハ穴玉のこゝろなること、いちじるく、それを例にしておもへはこれも穴瓊なるべし、天の瓊矛といへるものハ、たまを、をにつらぬきてそれをにといひそのにをかけたる矛なればこゝろいふべきをぬにうつしていへるが、合せことばの創なりその八尺瓊は、あな瓊にて、あなあれバこそ緒をバ通し

十一丁表

たるものなれ、その穴は、人のあけたる穴にはあらでおのづから穴のあきてなれるたまを、つらねたるがめつらしくめでたきにより、あなにやしと、ほめたまへるものならん、なかだちをしたる

事之甚切皆称「阿那」といへるはよし、おもしろたのしなどの説はよしがたしこの書は今の京になりてのちにいで来たるふみなれば、さばかり古

十四丁裏

書といふにもあらぬを人の古事記日本書紀に合せてもてはやし、何事の證にもひき出るハ齋部氏の古傳をしるしたるものなれハなるべしその古傳はたふとふべし廣成宿祢の説ハさのミ

たふときものにあらず、このおもしろ、たのしなどの説、古言にくわしき人ハわらふなるべしおもしろハまつそれにてもきこゆべし、たのしハあまりにしひたる説なり、そはとまれこれらのあなハよろ

十五丁表

こぶこ、ろより、なげきとなりていづる聲なりよろこぶ心も、むねにせまるなり

東遊歌曲譜 駿河歌 安奈也須良介、引安奈やすら、安難阿奈やすらけ ねかのをの、ころものそでをたれてや、安奈やすらけ
このあなやすらけも、あなたふとのあなもとももよるこぶかたちなり、そのうちあなたふとのあなハ、わがおよバぬをほむるこ、ろなり

○あや

あやもあなに同しく、やハことばの下におくたすけのこゑなるを、ひきあげて、あやといふなり、神名に阿夜訶志古泥神おはします、あやかしこ

はあなたふといふに對して、ひとしきこ、ろのことはなりあやとあなとのたがひめをおもふにあやはあらはれてつよく、あなハかくれてふかきこ、ろ見えたり、古事記沼河此賣のうたに阿遠

十六丁表

夜麻にひがかくらは云も、ながにいはなさむを阿夜爾、なこひきこし、やちほこのかミのミこと」とあり、このあやにハ刀薙ハのさくらはなのにはひハもあなにといへるたくひにて、いハなさむをあやにと、いはなさむをにつけてこ、ろうべし、あやにうれしくかしこきこと、よめるなり、

刀薙こまにしきひもときさけてぬかがへにあどせろとかも安夜にかなしき、同 あかミヤ

十六丁裏

まくさねかりそけあはすかへあらそふいもし安夜にかなしも、同あしひきのやまさハひとのひとさハにまなといふこが安夜にかなしさ、これらは身にしみてかわゆくおもふこ、ろをあやにかなしといへるなり人はえずして、わがえたるをよろこぶこ、ろなり、

同 かはかミのねしろたかがや安夜爾安夜爾
さねさねてこそことにでしか、かさねていへるハ

十七丁表

深くなげくこ、ろなり、あやにさねあやにさねてこそといふこ、ろなるへしこれも人ハえすわがえたるをよろこびて、さねさねし成べし、
啗解にかやハ通音にて、あやの序におきたる

ならんととけるハこゝろゆかず、これハたゞあ
らバれてことにいでしたとへ成べし

雄略天皇紀に泊瀬小野をほめて阿野你うら

ぐはし阿野你うらぐはしと、よミたまへる歌あり

十七丁裏

ぬけいで、よしとほめたまふなげきなり

萬葉にかけまくもあやにかしこし、かけまくも

あやにかしこくとよめるうた多くミえたり、あや

にたふとし、また、あやにくはしく、又あやに

ともしミ、などほめていふこゝろなり

同「千ワかせなをつくしへやりてうつくしミおびハ

とかな、阿也尔かもねも」あやにねんかもといふ

べきをおきかへていへるなり、あやにねんハなげき

十八丁表

てねんとなり、あやにハとほくさかりてあるをな

げくこゝろのこゑなり

○あはれ

古語拾遺云、阿波礼阿那於志呂阿波礼言ハ天

晴也とあるハ例のうけがたし、こゝはあまはれにて

もきこゆべけれど、そのたびとあはれなどの、あは

れハ、あまはれにてハときがたし、本居先生ハア、ハレ

ととかれたれどくはしからず、それにも猶おち

十八丁裏

つかず、是によりて今つらく考ふるに、あな、あや共に

上下におく歎息の助言をあはせて、歎息する

こゝろなれば、はもそれにひとしく、霜のふりハも、な

どいふハものハにて、それを合せたるものならん、志かおもひ

て又考ふるに、あなに、あやになど、はいへれどあはにと

いへることなく、あわれといひて、あなれ、あやれ

といへることなければ、この考もまたいたづらごと

なりこれによりて、よく考ふるにこのあハは

十九丁表

みつねが歌にあハぢにてあハとはるかに見し月の

ちかきこよひハ所からかも、とよめるたぐひのあハと

いふことバにれをそへたるものならん、かのあなに

あやに、のにも、てにをはの、にて、其に心を

ふくめたるものなれば、あはれのハも、てにをハの、

ハにて、あハといひて、いひのこすこゝろなるを、今

すこしふくめてあハれといふなるべし、

この考えこそ、語意のまことかなふべけれ、因ナミに

十九丁裏

かのみつねがよめるうたのこゝろをとくべし、源氏

物語松風の巻に、めぐり来て手にとるばかり

さやけきやあハぢのしまのあハとミシ月と

あるハ、新古今集卷上 躬恒、あわぢにてあはと

はるかに見し月のちかきこよひハとところから

かもとよめる哥をとれるものなり、このうた撰集

にてハ、新古今集にとりてあれと、源氏物語

のいてきしころ世に名高かりし歌なれば

二十丁表

とられしなり、このうたハ躬恒があハぢの掬

にてかの國へくだりてのち、のぼり来て、大内の

月をミてよめる哥なり、淡路にてハ、阿波の、なる

との月を、あれハとはるかに見たりに、ちか

きやうにおほゆるこよひハ、雲のうへといふ所がらなるべしといふ心の哥なり、されバこのあハとハ阿波門と它者ととをかねたる物にて、あれはと見し月といふこ、ろなり

二十丁裏

古書にあハれといふことばいとおほくして、あぐるにいとまあらず、そのうちいさ、か耳だつをあけて是をいふべし

古語拾遺に云、阿波礼あなおもしろ

これハ、ほめていふあハれなり、心もことばも

わが及バぬところといふこ、ろにほむるなり

大井川行幸和歌序あハれわが君の御代なが月

のこ、ホかときのふいひて

二十一丁表

これハ御代をほめていへるなり、あれハとときてハ

たがへるやうになれどしかおもふハ、すゑを見ていふ心

にて、そのもとをたづぬれハ、ぬけいで、物にこと

なるをあとほめて、あハ格別のものよといふ

こ、ろなれば、たかはず、他の御代ハあれど、このミ

よハぬけいて、めでたしとおもふこ、ろを、歎美し

て、あハれとうち出てたるなり、

古今集雜体王生事等 あハれむかしへありきてふ人

二十一丁裏

まろこそハうれしけれ、身ハしもながらことのはを、

雲の上まできこえあげ

これも人にことなるを、歎美していふあハれなり

他のおよばぬこと、ほむるこ、ろなり

古今集夏あハれてふことをあまたにやらしとや春におくれてひとりさくらん、

ものにごとなりとほめらる、ことを、あまたの様にやらじとやといふこ、ろなり、

二十二丁表

源平盛衰記十五頼政云々 埋木の花さくこともなかり

しに身のなかはてそあハれなりける、

このうた平家物語四にハ身のなるはてぞかなし

かりけるとあり、盛衰記につきてとけバ、歎美す

るこ、ろにて、あハれといへるなるべしわれながら

他人の及ばぬことをしたりと、歎息したるもの

ならん、しかミざれば上の句にうちあハらず平家

物かたりハあやまれるつたへなるべし

二十二丁裏

拾玉集慈園何事もおもひすてたる山さとにあハれ

よしなく匂ふはなかな

これも他にことなるを歎美するこ、ろなり、この

うたなどよくあハれといふことばを、つかひえたりと

いふべし、すべて古人の哥を見るに、よく其ことば

をつかひえたりとおほゆるあり又さもあらぬあり

いまよむにも、よくそのことばの、はまるつばを見て

よむべし、ことバのはまらぬうたハ、おもしろからぬもの也

二十三丁表

拾遺集雜春よミ人しらす、年毎にささハかはれど

梅の花あハれなる香はうせずそありける

他にことなる香はうせずあるよしを歎美して

いへるなり

これら八上におくあはれなり、ことばの下におくあはれもあり

日本書紀 日本武尊の哥に、おはりにたゞにむか

へるひとつまつ阿波礼、ひとつまつひとにありせはきぬきせ

二十三丁裏

ましをたちはけましを

この哥古事記にハひとつまつ阿勢衰とあり

あせをハ、我兄乎といふこゝろにて、わがしたがふ兄

よと歎息したるものなり、それにかへあはれと

つたへたるつたへもあるをもて、あはれハ他に異

なりと歎美することばなることをしるべし

あはれといふことばを、上にいひおくと、また下につけて

いふとの差別あり古事記におもひづま阿波礼と

二十四丁表

いひ 武烈天皇紀になきそほちゆくかけひめ阿波礼

推古天皇紀にそのたびと阿波礼といへるたぐひは

ひとつまつあはれといへるにひとしく下におくあはれ

なり万葉阿波礼その水手同九あわれ其鳥

なといへる八上におくあはれなり、又同一にあわれ

我妹子まちつ、あらんといへるたぐひは、あわれを

まちつ、あらんまで、かけていへるものなり同六

あわれのとりといわぬ日ハなし、などよめるも有

二十四丁裏

いづれもあるひはものことなるを称美し、あるひハ

こゝろにしミて愛するをいひ、あるひハその哀情を

察してよめるたぐひにて它者かと見ながら

わがひとつになられぬをなげくこゝろに、おちぬハ

あらず

猶多く古人の用例をあげてうまく此ことばの

こゝろをさとるべし、これにて筆をとゞめ是より

阿といふ聲のこゝろをくはしくとかとす

二十五丁表

あといふこゝろのこゝろ、つゞめていへバわれとへたてあり

にてことたれど、これをのべていふときハ、ながく

しきこゝろあるなり

ひとつものふたつにわかり、わかりわかれてへだたり

ゆく、へだたりてあはず、あふべきすちあり、いま

わかれてありこの故にあはず、もとひとつなり

この故にあふべきすぢあり」といふこゝろをふく

ミて、なれることばなり

二十五丁裏

このことばおのれはたちあまりのころ考ええたる

ことにて矮屋一家言といふふみをあらハして

いひおきたることなるを、そののち年月考へ

こゝろみるにこれにたがふことなし今又この

心をくわしくいはんとす、

ひとつものふたつにわかり、

別二の繫辞伝にハ易有二大極一是生二両儀一両儀生二

四象一四象生二八卦一と見へ、乾鑿度二にハ易始一於

二十六丁表

大極一大極分而為二二一、故生二天地一といへるたぐひ、皆唐土

につたはれる易理をいへるものなるを、わが五十音

図のはじめなるあといふことばにこの理のそなハリ

であるを、あやしき事に人はおもふめれと、まこ

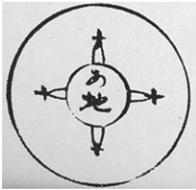
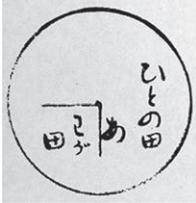
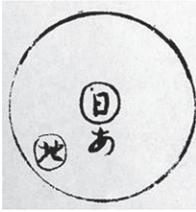
とハ、しかあらでハかなはぬことハりのあるもの也
 易ハ唐土へさづけたまへる神告なり五十音図
 ハわが國にのこし玉へる神宣なり、彼此相発
 して道はあきらかになるべく、神代より定

二十六丁裏

めたまへる天つ神の賜物なりけり、附ハ動物の
 地上にたつ基なり、畦ハ地にありて、人の彼我
 をわかつはじめ也山物植物これによりて
 おのがま、にとることをえず、地と人とひとつ
 ものふたつにわかるハ、あしのうらこれなり万物
 ミな地上のひとつものにて、わがもの人のものと
 わかるハ、田のあぜをもと、す、天つ日をあなたに
 見るハ地上の人の眼にて、日地同じく世界

二十七丁表

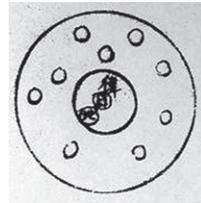
のものながら、ふたつにわかれてあひかよふこと
 をえず地上より它と見るものなり、この三つの
 ことはまづ天地人の大理ハそなはりてあり
 ひとつもの
 天 ふたつにわかり 地 ふたつにわかり 人 ふたつにわかり



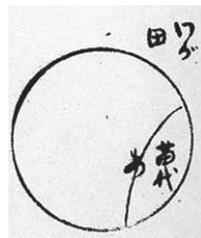
二十七丁裏

おなし天にて経星緯星のワかちあり、ひとつもの
 ふたつにわかれてあるなり、
 経星天のうちに緯星天あり

まことハこれよりときおこす
 べきものになん



ても
 又あにてわかつこと
 あり



わが田のうちに

二十八丁表

苗代のあなどこれなり、
 おなじわがあしのうらに左右のわかちあり、ひと
 つものふたつにわかりといふによくあたれり、



おなじわが身をあとといふときわといふこ、ろとハ
 ふたつにワかりてあるなり

かひとりて得ることあり、お、やけよりたまはることあり、これも又あふべきすぢあるなり

苗代をあをはなして、本田へう、るもあふべき

三十一丁裏

すぢあるなり

左右のあしのうらはなれてあれどもあふべき

すぢありてよりあひあゆむときハいつくまでも

いたるこれも又あふへきすぢあるなり

いまわかれてあり、この故にあはず

あといふこゑのこ、ろはすべて此こ、ろをむねとす

日と地といまわかれてありこの故にあはざれと

三十二丁表

そのかミ第二の神代より第三第四第五の神代

のはじめまでハ日地往来のしげかりけり第五の

神代にいたり、されはなれてあひかよはず、あひ

かよはずして、日球より、地球を、たすけすくひ

玉ふ事に定まりしハうれしくめでたきかむは

かりにて、ありしなり、これらのこと、神典を信せ

ざる人にハかたりてかひなき、いたづらことなり、これ

を信ぜざるものハあといふ聲のおもてに拘泥

三十二丁裏

して、内證にあふべきすぢある真理をしらぬ

ものになんありける、今の世の奇怪をかたるは

よしなけれど、天地のはじめの神異を語るハ我が

天皇の御系の真をあらわすわざにして我國に

生る、人の、かならずしりてあるべきことなりその

神異にハ、一々その理あることにて、眼前の天地に
徴あり、今までハその神理の開けざりしに

より、人は信ぜざりしなり、わが古傳通解

三十三丁表

にときわくるを見て、わが古傳の神異、眼前に

益ある事をさとるべし

田と田とあのへだてであるによりて今ハあハさる也

左右といふことあるによりて、あしはひとつになら

ざるなり、ひとつにならぬことそよけれ、ひとつに

なりたらんに、身を一尺も身のころへうつし

がたかり、あしかせをかくるハ、わかれてあるあしを

ひとつにするわざになん

三十三丁裏

もとひとつなりこの故にあふべきすぢあり

人死にてのち其たましひ高天原にのぼる古説

説あり、刀葉集にあまの原岩戸をひらきかむ

あかりあがりいましぬ、とあるハこれなり、いかにも

世にあるとき善事をなしたる人ハしかありぬべ

きことわりなり、高天原のうらむかひによミの

國ありあしき事をせし人ハよミの國へゆくへき

こともまたありぬへきことわりなり佛家に

三十四丁表

天堂奈落の説あるハ、釈迦がミだりにつくり

設けたるものにハあらずかの國にもさる古傳の有

て、これを潤色したるものになん、諳経に文王

のぼりて帝の左右にありといふことあれハ、唐土

にても、死後上天の説ハいにしへより有し事也

天主教にもまた其説あるよししか諸方にて
いふをおもへハ、死後にたましひのゆくところ必
定りありて、善人のたましひハ日球中にいりて

三十四丁裏

天神にまじはり、悪人のたましひハ黄泉の國の
きたなきところにしつミてくるしむものと
おもひ定めてあるへきなり、神ハ人の見ざる
ところを見玉ふものなり、つつしむべし、唐土の
古書に魂ハ天に帰し、魄ハ地に帰すといへる
こと有魂の天に帰すといへるはあたりまへ人の
すべき忠孝貞の真仁義の實をつくしたる人
の魂は高天原にのほるをいひ、魄ハ地に帰すといへるハ

三十五丁表

人欲の私にひかれてあしきことをしたる人の
たましひハ黄泉國に入りてくるしむをいふ文と
見るへきなりこれらのことに付てはくわしき
考あり、大きな論あり、別に死後安心録といふ
ふミをかきてこれをいへれハ、其書につきて
さとのべしいまわかれてあり、この故にあハすといふ
ハあ字のおもてにてもとひとつなりこのゆへに
あふべきすぢありといふハあ字のうちうら

三十五丁裏

なり肉身ハ、其おもてにてゆくべきところにあら
ず本心ハ其本に帰すべき理ありてその本に
かへるものなり

あぜのつちも田のつちも、もとひとつなりあぜを
くづせば、ひとつになる、ひとつになりて大地につく

大地ハ、もとなりされバ人ハわがものとおもふ執心
をあさくして本によるべきものになん、父はもと
なり君ハ本なり、夫ハ本なり、この順のとりかた

三十六丁表

あしきときハ、我が私欲にひきつけて此境界を
ミだる事あるべし、とりかたよけれバ忠孝貞の
まことにいたる、偏中と正中と差別有ハ是也
本にハ本のあるものにて、本をおわて本につくとき
あふべきすぢあり本の又本にあふを神道の
きハミとす

左右のあしもとひとつなり、これもあしくこ、ろ
うるときハあしかせをかけて、あるかれぬたぐひと
三十六丁裏

成べしよくこ、ろうるときは左右は左右ながら
におもひあひてよくその本によることをしり
其身にしたがひ、そのこ、ろにしたがひて、ほど
よくあゆむときいつかたへもゆくものなり、これ
を、もとひとつなりこの故にあふべきすぢ
ありといふことはのまこととさとのべし
これまでハことばをあハせてとけるなり、これ
よりハひとつにわけてとくべし

三十七丁表

○ひとつものふたつにわかり
人といへバひとつものなり男女といへバふたつに
わかりてあり

わかりわかれてへだたりゆく
いざなぎのミこと、いざなみのミこと、みとのまくハ

ひしたまひて國土をうミたまへるとき國土に
男女のたねをうミつけ置たまへるが、のちに、わき
いつる時にあたり、日ごとに千五百うぶやをたて

三十七丁裏

たまへるハわかりわかれてへだ、りゆくはじめなり
いざなミのミことの千人くびりころしたまへるは
消長の理にて、こなたをかきてかなたにふやし
玉ふべきかむはかりになんありける
へだたりてあわす、

兄弟のあひとつぐべからぬおのづからの神のミさだ
めハ、男女へだてある真典なりまことに、たふとき
ことになん

三十八丁表

あふべきすぢあり、
なかだちありて夫婦となす
いまわかれてあり、この故にあはず
よそのむすこと、よそのむすめとわかれてあり

この故にあはざるなり
もとひとつなりこの故にあふべきすぢあり
異類とあひとつがぬ神のミさだめも又たふとし

兄弟ハちかくしてあひとつぐべからぬものなり
三十八丁裏

異類ハ上を、くしてあひとつぐべからぬものなり
その中央に他人の男おとこと他人の女メとあふべきすぢ
あり、いまへだたりてあれど異類ちがひにあらず、ひ
ひとつものなり、穢多のたぐひにとつがざるハ異
類にちかきをさらふものなり、をぢおば、おひ、めひ、

にとつがざるは、兄弟にちかきをさらふものなり
おのづから、神のさためたまへる
境界なり

三十九丁裏

○ひとつものふたつにわかり
母その子をはらむときひとつものなり、うむとき
ふたつにわかるなり
わかりわかれてへだたりゆく
生れいでたるときあるはだかなり、知慮わか
らす母のねをわかれず月をへ年をふるに
したがひ事のすぢも、わかり、母の手をも、わかれ
へだたりゆく

三十九丁裏

へだたありてあはず
初生の時にあはず
あふべきすぢあり

初生の時のことをおもひやればあふべきすぢ有
初生のとき、わがものとしてハ、あることなしこと
くくくと見るものばかりなり父うぶぎを
きせ母乳をのましめ、そのいへにすましめて
そだてたまふまにくくとミしものわがもの

四十丁表

にしてそだちたるなり、おとなになりて、ゆづ
られてえたる家督も、死ぬる時はこのよに
のこして、它と見なしてゆくより外ハせんかた
なきものになん
いまわかれてありこの故にあはず

初生のときをおもはぬなり

もとひとつなりこの故にあふべきすぢあり、
初生のときをおもへハもと一身より身ハなかり

四十丁裏

しものなり、此ことをおもひ出しおもひやり

て、父母の^大恩をおもふべきことなり、たが身も
ミなしかり、あるはだかにてうまれ、あるはだかにて
ゆくことをさとり、よにあるあひだ欲をうすく
し、道をよくし、^忠孝貞の真をうしな

ハズ仁義をつとめて、わが國勢をつよく

すべし、一人不義を行ふものもあるも國の、よわミ

なり國忠のこ、ろざし深きものハ身を慎みて不義を

四十一丁表

行ふべからず

○ひとつものふたつにわかり、

親といへハひとつもの也、父母といへハ二つにわかるなり

わかりわかれてへたたりゆく、

父母ともうやまふべくしたがふへきものなれど

父ハことにたふとし、そハ、その母もわれとひとしく

たふとミたまふものなれハなりこれハ、わかりと

いふことばにあたる、又父のうからあり母のうから

四十一丁裏

あり、これハわかれてにあたる

へだたりてあハず

父の心と母のこ、ろとひとしからざるときその

子は何れにかしたがはんとする、父の心にしたかふハつね

なり、父のこ、ろあしく、母のこ、ろよきたぐひハ母

にしたがひて父をいさむべきものなり、そのとき、わ

がミをあとしてわたくしなく、よく父母の心
をくミわけて、道にしたがふ時ハ、かたくなゝる

四十二丁表

父母にてもその子の孝心に感ぜざることハあら

ざるべし、

あふべきすぢあり

夫婦の愛情、親子の真情ハ、かミのさだめたま

へるものにして、下よりまことをつくすとき上に

たつ父母夫、其孝貞に感ぜざる事ハあらぬ

わけなり

いまわかれてあり、この故にあはず

四十二丁裏

親子兄弟親族かたミに不和なるときあるもの

なり、これは它と見るこ、ろのす、ミにて我身を

あが身としたがひて考ふれハ不和なるべき

ものにハあらずもと一輪のものにて

あるなり

もとひとつなり、この故にあふべきすぢあり

いか程不和なる兄弟にても人にうたる、を

見てをる兄も弟もあらぬものなり我慢を

四十三丁表

だにミづからくじけバ父母兄弟親族一和すべき

ものになん、上巻にあらはしたるわが図、又

おのが身をあといへることのこ、ろをとける

ことバを合せ見て、この聲にこの理ある

ことをしるべきなり

○ひとつものふたつにわかれ

地球上に萬國ありひとつものなれど同言
異言とふたつにわかれてあるなり

四十三丁裏

わかりわかれてへだたりゆく、

わが日本國ハ天下を家にする國なり唐土

は、天下を官にするくになり、かくのごとく

その大本わかりであるなり、その外、アジア、エフロツ

パ、アフリカ、アメリカ、新和蘭、わかりわかれてその

おしへ、その國俗、その食物、その動物同

じからす

へだたりてあはず

四十四丁表

そのくに／＼にそのくに／＼のことばあり

あふべきすぢあり、

訳官といふものありてあはするなり

いまわかれてありこの故にあはず

今わかれてあるハ、人間世界のおもてなり、

この境界ハミだるべからぬものになん

もとひとつなりこのゆへにあふべきすぢあり

これにハくさ／＼のこ、ろえあるべし、西洋學

四十四丁裏

をするもの、こ、ろになりていばサロモン通商

のミちをおこしてよりこのかた、彼此これに

よりて利をうるこおほく、今ハ四海一家の

如くなりてあるを、わが日本國のミ通商

せざるハ天意にもどるものなりとおもふなる

べし、これハこのもとひとつなり此故にあふべき筋有

といふ理をあらく見たる説なり、又わが

日本國はむかしより海外に孤絶して外邦と

四十五丁表

交ハらぬくになりいづくまでもうちをはらひて

異船をわが海岸につながしむべからずといふ

ものあり、これハいまわかれてあり、この故にあはず

といふ理をとらへて、それをいひはるもの也

修正その中に居てこれをかむかふるにこの二説

ふたつながらかたよりてありぬべし、もとひとつ

なりといふ事のこ、ろをとき得て所置を、なす

へきなり、あらくとくとくハ、かの西洋學者

四十五丁裏

の見識におちいるべし、これをよくとくとく時ハ

万代不易の法となるべしそはわが駟戎閭笮

にしろしおける大帝爵の一議なり、わが神代

の古傳ハ、宇宙にわたる大經にて、万國是に

よるべき宝典なりその旨をときあかすとき

ハ天地のはじめよりわが 天皇を世界の総王

とたてたまへる神議いちじるきものなれバ異

言の人もミなこれによるべきことぞかし

四十六丁表

もとひとつなりといふハ、この旨にして、万國もとひと

つ地上なり、これをとりすむる総王なくてかなハぬ

ことなり、いま万國をミわたすに、神代より統を

つたへてたがハぬ國王、外國にハあらぬなり、さらハ帝爵

の國のうちより、我國をぬきいだして大帝爵

の國としべきこと穩當の論といふべし、つひにハ
わが私議の、公議となるときありぬへきなん

あ字のこゝろにひきつけていへバ大かたひきつけ
四十六丁裏

られぬことはあらぬものなり、さのミハ、とて筆を
さし置なりいとまのひまあらんとき、この神解
の外にあ字の義をこまやかにかきしるして
よの人にしめさんとす、こゝろざし深き人この
二卷を見たらんにハ、わがいはぬ義理をも
さとるべきことなりかし

(丁末に「幡本文庫」方形印)

跋一丁表

音図神解一ノ下令門

人開正當書寫一校

之

安政二年七月 野之口隆正(氏名中央に方形印「たかまさ」)

跋一丁裏

音図神解卷之一^上二卷

受野之口隆正先生奉納文庫

安政二年^丁十月

文預 羽田整敬雄(花押)

參河國羽田八幡宮文庫(方形印)